

③ 業務パッケージソフトによる NGN サービスの活用法

(日野和麻呂委員:㈱オービックビジネスコンサルタント開発本部部長)

NGN の企業活用が注目されている。NGN は電話回線の信頼性とセキュリティがデータ通信においても享受できる次世代のネットワーク回線である。NGN の登場によって、企業におけるネットワーク活用はどのように変化するのか。また、通信事業者はどのようなビジネスモデルの変革が求められるのか。本章では、企業の IT システム化の第 1 ステップである基幹業務システムにおける NGN 活用の点から、これらの点を考察してみたい。

1. 中小企業 IT 化課題

「100 年に一度の不況」といわれる現状において、企業の IT 投資は減少傾向である。しかし、インターネットの普及によって、企業競争はオンデマンド化、グローバル化が進み、より一層の「効率化アップ」「経営スピードアップ」が求められており、その課題解決において、IT 利活用の促進は必須事項といえる。

一般的に、日本の中小企業は海外と比較して、LAN を超えた範囲での IT 共有利用が進んでいないといわれている。具体的には、距離が離れた部署間、事業所間での情報共有は、主に E メールでの情報共有レベルとなっているケースが多く、企業全体での IT の利活用が進んでいるとはいえない。

2. 基幹業務システムのネットワーク活用

企業の IT システム化の第 1 ステップは、どのような企業でも必ず行う基幹業務のシステム化である。中小企業の業務システムの利用範囲は単一 PC や、LAN 内までにとどまっている企業が多い。すなわち、その導入目的の多くが単一業務処理の“効率化”のみでとどまっているのである。

このため、全社視点で見た時に新たな業務課題が発生している。具体的には、「距離や部署を超えた、システムの共有活用課題」と「IT 情報のマネジメント視点活用」である。

ここでは、いくつかの企業での事例を紹介し、その課題と解決方法をご紹介します。

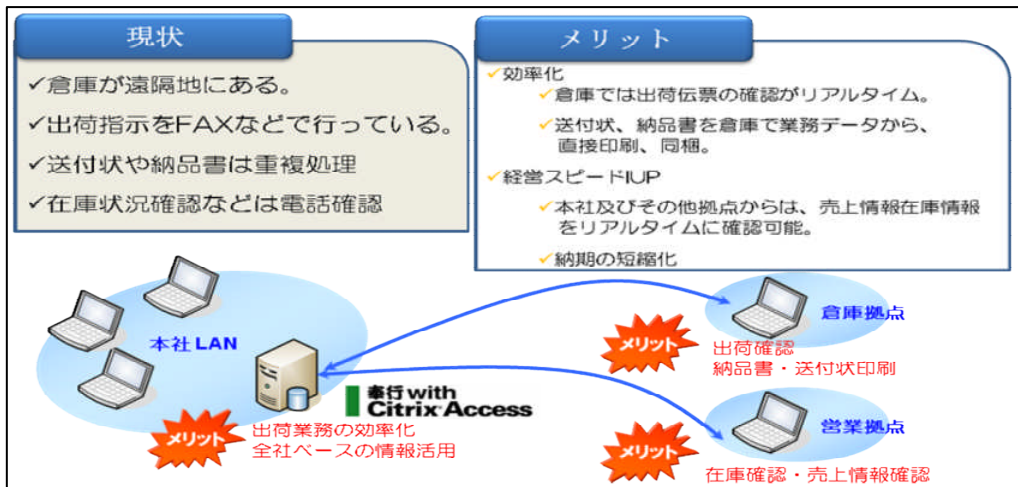
(1) 倉庫拠点での出荷処理のスピードアップと営業拠点からの在庫確認

A 社では倉庫拠点が離れた場所にあり、日々の出荷指示を FAX にて行っていた。このため、出荷変更への迅速対応ができにくいことや、納品書や送り状を出力するため、別のシステムに二重入力が必要になるなど、業務の不効率が発生していた。また、営業拠点では、在庫情報を電話にて倉庫に逐次確認しなければならないなどの課題もあった。

この課題に対して、倉庫および営業拠点と本社間を結ぶ、インターネット VPN 環境を構築した(図表 3-1)。遠隔拠点から高速で安全に利用できる業務システムにリプレースすることで、全社で IT 情報の活用が可能となった。迅速な出荷指示切り替え、倉庫での必要帳票の直接印刷、営業拠点からの在庫の直接参照が可能となることで、不効率的な業務処理がなくなり、業務スピードアップを実現できた。また、営業拠点マネージャーや経営者層による販売実績情報

のリアルタイムでの把握が可能となり、経営意思決定のスピードアップを実現した。

図表 3-1 本社と倉庫および営業拠点インターネット VPN で接続



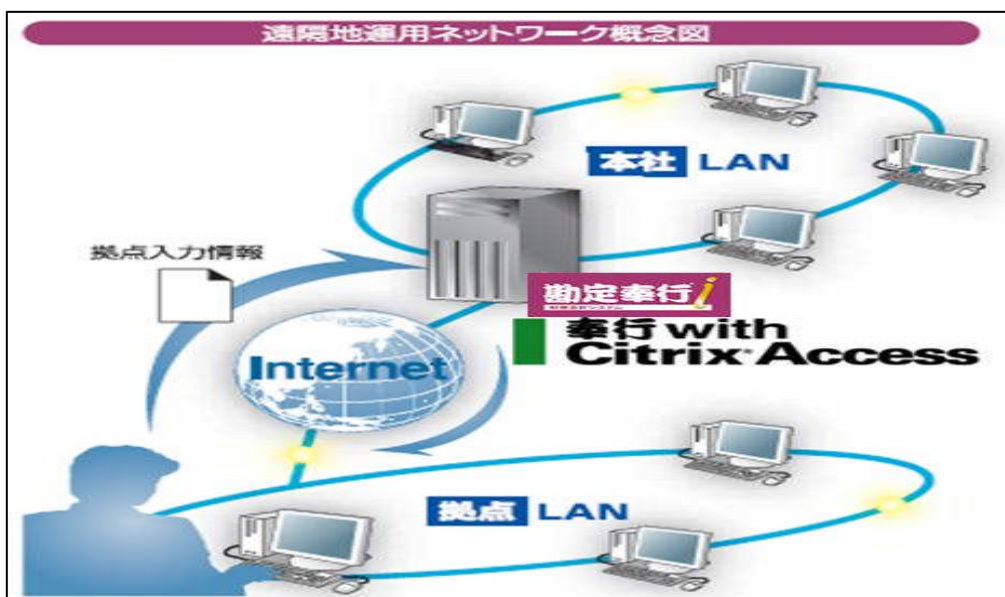
(2)安全高速な通信環境と拠点運用をフォローする業務システム

事例のような企業の基幹業務システムの遠隔運用は、大手企業以外では導入が進んでいなかった。その理由は以下である。

- ①基幹業務システムを安全に運用可能とする通信インフラ構築が高額で複雑
- ②遠隔地運用を想定した低廉な基幹業務システムがない

「奉行シリーズ」で知られる、基幹業務パッケージシステムの開発会社である「オービックビジネスコンサルタント」では、遠隔地運用を希望する企業向けに「奉行 with Citrix Access」ソリューションを提供している(図表 3-2)。

図表 3-2 「奉行 with Citrix Access」のイメージ



これは、遠隔端末にそのソフトをインストールすることなく、本社端末同様の処理を高速かつ

安全に利用できるソリューションである。また、運用環境としては、高速で安全なインターネット VPN を推奨している。従来の VPN 環境構築では、専用ルーターを用いた暗号環境の構築が必要であり、導入検討企業、提案企業ともに、大きなハードルとなっていたが、近年、NTT 等のキャリアから提供される VPN 環境を組み合わせることで、安価で簡易な拠点間通信環境が実現できるようになっている。

さらに「フレッツ 光ネクスト」(NGN)との組み合わせにより、その安全性と安定性が一層アップし、企業による業務システム利用範囲拡大を、安全高速に支援可能となる。

このような需要拡大をにらみ、オービックビジネスコンサルタントと NTT 東日本は、「奉行シリーズ」と「フレッツ VPN」を組み合わせた「奉行 on フレッツ VPN」を展開し、中小企業の IT 利活用の拡大を支援している(図表 3-3)。

図表 3-3 「奉行 on フレッツ VPN」の概要



そして、これらの IT 活用の拡大を下支えしているのは、ネットワークのイノベーションである。今後の IT の発展は、このネットワークの進化を見据え、どう対応していくかがキーポイントとなることは間違いないといえるだろう。

3.クラウド/SaaS

ネットワークの活用による企業 IT のイノベーションとして注目されているのが、「クラウド/SaaS」である。

クラウド/SaaSにはさまざまな定義があるが、一般的には、①ネットワークを超えた先の IT システムやインフラを利用する、②自社所有ではなく、システムやインフラを月額料金などで利用するという新しい IT の活用方法と捉えることができる。

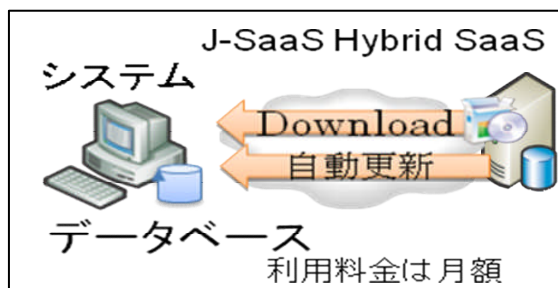
クラウド/SaaS は、初期費用の削減と、運用コストの削減を求める企業ニーズに対応しており、今後数年間で大きな普及が見込まれている。

4.ハイブリッド発想

すべての IT システムは数年後、クラウド/SaaS に移行されるといった極端な見解もあるようだが、それは現実的ではないだろう。情報系といわれている E メールやグループウェアなどのシステムは早期に移行が進むと思われるが、企業の根幹システムである基幹業務システムに関しては、特に移行は緩やかに進むと思われる。クラウド/SaaS は企業にとって、IT の選択肢の拡大と考えることができ、企業は自社の課題に合わせて、最適な IT を選択利用していくことになるだろう。

図表 3-4 J-SaaS Hybrid SaaS のイメージ

そこには「組み合わせ」という考え方も必要である。例えば、経済産業省が支援する中小企業向けの SaaS プラットフォームである「J-SaaS」では、約半数のソリューションがメジャーなパッケージソフトをダウンロードし、自社 PC 内にセットアップし、起動時に認証して運用する「Hybrid SaaS」となっている(図表 3-4)。



システムやデータは自身の社内で運用し、料金は購入ではなく月額などの利用料金にすることで初期費用を削減できる、パッケージソフトと SaaS の組み合わせシステムの例と考えることができるだろう。

中小企業においても、主要な業務の IT システム化が進んでいる。すでに導入している IT システムを単にアウトソーシングし、運用コストを下げるだけでは、よほど大規模なシステムを運用している会社でない限り、切り替えのメリットはない。

現実的には、既存の IT システムを活用しながら、まだ IT 化されていない業務範囲をシステム化するのに、クラウドや SaaS を活用する組み合わせの発想が重要であろう。クラウド/SaaS の利点は、運用コスト面だけでなく、ネットワーク接続の容易性と考えられる。

1つの例としてオービックビジネスコンサルタントでは、パートナー企業である TIS との協業により、「EC センター for 奉行」という、EDI サービスと ERP パッケージ製品である「奉行シリーズ」を組み合わせたサービスを提供している(図表 3-5)。

図表 3-5 「EC センター for 奉行」のイメージ



サプライヤーとバイヤーが自社の基幹システムから、ネット上の EDI サービスを連携利用することで、企業間の受発注業務を効率的に、かつ迅速に実現することができる。パッケージシステムだけでは難しい点を、SaaS システムで補填し拡張している例といえるだろう。

このようなクラウド/SaaS という IT の新しい環境は、一般的な定義を超えて、ユーザー企業の利用ニーズに合わせて、形態をさまざまに変えて普及していくことが予想される。

5.クラウド/SaaS の課題とネットワークの役割

ここまで、クラウド/SaaS という IT の新たな変化について見てきたが、この普及の基盤が、ネットワークインフラであることは、改めて確認する必要はない事実である。そして、クラウド/SaaS については、従来の導入型か、クラウド/SaaS かという選択ではなく、その業務に適したものの組み合わせによって普及していくことが予想される。

そして、その普及において、今後課題となってくるものが、システム連携である。企業における IT 導入は今後、単一業務の効率化ではなく、幅広い業務の IT 化が求められるだろう。そのためには、ソリューション連携は必須であるが、ネットの先に稼働環境が存在しているクラウド/SaaS ソリューションでは、この連携が十分な状況とは言えない。また、クラウド/SaaS 間だけでなく、企業内で稼働するオンプレミスシステムとの連携も課題である。

これらの課題解決に必須なのが、信頼性が高く、かつ高速なネットワークインフラである。さらに、中小企業が導入できるコストパフォーマンスと、運用管理者を必要としない、簡易導入と運用性が求められる。

そして、これらのニーズに応えることが可能なインフラとして期待されているのが、NTT の NGN(フレッツ 光ネクスト)であるといえる。

6.NGN の活用と今後求められる提案業者の役割

今後の企業における IT 活用にネットワーク活用は必要不可欠であることを確認してきた。そして NTT の NGN(フレッツ 光ネクスト)は、そのインフラとして期待されている。だが NGN は回線インフラでしかなく、企業のネットワーク活用において、現段階では NGN でなければならないという状況ではないというのも事実である。

しかし、中小企業における IT のネットワーク活用は、まだまだ十分とは言えない状況であり、NGN の登場は、企業において IT のネットワーク活用の検討の大きなきっかけとなり得るものである。

そして、今後の企業への IT 活用提案において、ネットワークインフラの活用は必須であり、そのような企業への提案業者には、「IT 提案力+ネットワーク提案力」双方の提案力が求められるであろう。